

弘高を考える（その1）

校長 高橋信進（たかはしのぶゆき）

1 校名

寛政 6年（1794）藩校「稽古館」建設 （追手門前、9代 寧親）

明治 5年（1872）「東奥義塾」創設 （追手門前、菊池九郎）

明治 17年（1884）「青森県中学校」開校 （青森市新町）

翌年 初代校長 一町田大江を任命

明治 19年（1886）「青森県尋常中学校」と改称

明治 22年（1889）弘前市元寺町に移転

明治 26年（1893）弘前市新寺町に移転、新校舎（現記念館）建築

明治 28年（1895）「青森県立第一尋常中学校」と改称

明治 32年（1899）「青森県第一中学校」と改称

明治 34年（1901）「青森県立第一中学校」と改称

明治 42年（1909）「青森県立弘前中学校」と改称

昭和 23年（1948）「青森県立弘前高等学校」と改称

「官立 弘前高等学校」大正 10年～昭和 25年（30年間）

2 校章

< 資料 1、資料 4 参照 >

（1）交渉の変遷

（2）「鵬」の由来-----莊子

（3）“鵬のうた” -----小田桐孫一先生

3 校歌

< 資料 2 参照 >

（1）校歌の変遷

4 教育目標

< 資料 3 参照 >

人間像「持って生まれたものを深くさぐって強く引き出す人」

（1）“少年に與ふ” -----高村光太郎

（2）高村光太郎について

（3）“鶏肋抄” -----小田桐孫一先生

<資料1> [校章について](#)

1 校章の変遷

昭和28年～現在

昭和26年～

昭和23年



円形に近い八稜の鏡の中に、正面を向いた大鵬を図案化した。

(弘中5年生の八木沢恒蔵氏の作品に、鳴海健次郎先生が手を加えたもの)

少し縦長で、大鵬が横を向いている。

翼を大きく広げた大鵬を置き、その下に「弘高」の二字を金色で浮き彫りにした。

(鳴海健次郎先生が再度図案化したもの)

2 荘子の“逍遥遊”より

北溟に魚有り。其の名を鯤と為す。鯤の大いなる、其の幾千里なるを知らず。化して鳥と為る。其の名を鵬と為す。鵬の背、其の幾千里なるを知らず。怒して飛べば、其の翼は垂天の雲の若し。是の鳥や、海運れば、則ち將に南溟に徒らんとす。南溟とは、天池なり。

- 莊子 ; 莊周(戦国時代の思想家)の敬称。「莊子」を著す。道家思想。
- 逍遥遊; 俗世を超越し、無拘束の広野に心を遊ばせること。
- 北溟 ; 北の海 鯤 ; 想像上の大魚 鵬 ; 想像上の大鳥
- 化して; 変化して 怒して; 勢い激しく 天池; 造化の作った海

3 小田桐孫一先生著「鶏肋抄」の“鵬のうた”より

莊子よ あなたの寓話を語ってくれ / その鳥が今 我らが徽章の上に意味ありげに羽ばたいている / あなたはこの鳥に何を仮託したのか / 今によう似た世のさまを嘆き 鵬の翼を振りてこの濁世から離陸しようとしたのか、それとも 蒼天の上から 片片たる率土の垣に相せめぐ群小の霸道主義者どもを見下そうとしたのか / 南溟とは何か / あなたの鳥は大志のシンボルだったのでしょか / あなたの真意を教えてください

<資料2> 校歌について

1 弘中校歌

- (1) 明治 43 年 4 月 運動会が終了しあと、一同によって斉唱された。最初は校歌として制定されたものではなかったが、歌詞の力強さや曲の勇ましさが生徒に受け、いつしか校歌「あだ文」として歌われていった。

「弘前中学校の歌（校歌に擬す）」

棟方悌二 作詞

| | |
|--------------|------------|
| あだなる文華をよそにして | 吹雪花散る鷹城に |
| 剛毅の姿堂々と | 立てり 健児の六百名 |
| 巖木の嶺の晴嵐に | 勤儉の旗翻へし |
| 鏡が池に影清き | 尚武の月を仰ぐ哉 |

(一高征露の歌ウラルニカナタの譜)

- (2) 大正 14 年 (1925) 生徒定員が 1,000 名と定められ、歌詞が次のように変わっていったと思われる。

「弘前中学校の歌（校歌に擬す）」

棟方悌二 作詞

| | |
|------------------|-------------------|
| あだなる文化をよそにして | 吹雪花散る鷹城に |
| 剛氣の姿堂々と | <u>たてる健児の一千名</u> |
| <u>岩木の峰</u> の晴嵐に | 勤儉の旗翻えし |
| 鏡ヶ池に影清き | 尚武の月を仰ぐ <u>かな</u> |

2 弘高校歌

- (1) 昭和 28 年 相馬俊介先生によって作詞（第一稿）された。

| | | |
|-------------|---|---------------|
| 北溟ちかき 陸奥に | / | 若草萌ゆる 鷹揚城 |
| 薫る万朶の 桜花 | / | 映ゆる鏡ヶ 丘の上に |
| 輝く文化の 旗かざし | / | 立てる希望の われらが母校 |
| ああわが弘高 栄えあれ | | |
| 、 省略 | | |

- (2) 第一稿に対し、三節は長過ぎるので二節に、荘重なものに、などの注文が出され、第二稿が作られた。

| | | |
|-------------|---|-------------|
| 青雲高く 津軽野明けて | / | 久遠の光の 輝くところ |
| 古城の麓 桜に映ゆる | / | なつかしや 鏡ヶ丘よ |
| 学びの道に 面影冴えて | / | 希望は高し 心の故郷 |
| ああわが弘高 栄えあれ | | |

- (3) 第二稿についても、「なつかしや」は情感が細い、校章の大鵬も入れて欲しいなどの希望が出され、第三稿が完成した。これに作曲家の木村茂先生が、力強さとリズムの関係で最後の部分に手をくわえ、現在の曲が完成した。

<資料3> 人間像について

(1) 高村光太郎の詩“少年に與ふ”より

この小父さんはぶきようで少年の聲いろがまづいから、
うまい文句やかはゆい唄でみんなをうれしがるにゆかない。
そこでお説教を一つやると為よう。みんな集まってほん気できけよ。
まづ第一に毎朝起きたら あの高い天を見たまえ。
お天気なら太陽、雨なら雲のゐる處だ。 あそこがみんなの命のもとだ。
いつでもみんなを見てみてくれるお先祖さまだ。
あの天のやうに行動する、これがそもそも第一課だ。
えらい人や名高い人にならうとは決してするな。
持つて生まれたものを深くさぐって強く引き出す人になるんだ。
天からうけたものを天にむくいる人になるんだ。
それが自然と此の世の役に立つ。
窓の前のバラの新芽を吹いている風が、
ほら、小父さんの言ふ通りだといつてゐる。

- この詩は、昭和12年(55歳)に雑誌「無風帯」5月号に発表された。昭和18年、年少者のための詩集「をぢさんの詩」として出版された。

(2) 高村光太郎について

- 明治16年、彫刻家高村光雲の長男として東京に生まれる。
- 明治39年、彫刻を勉強するためにアメリカに渡り、その後イギリス、パリを回って3年後に帰国する。この時、彫刻家ロダンの大きな影響を受ける。
- 帰国後、権威的なもの、世俗的なものに一切反抗して、一個の人間として生きようと、この頃から詩を書き始める。生涯を通して、批判精神の旺盛な人道主義者として生きた。(作品;「道程」「智恵子抄」「猛獣編」等)
- 昭和28年、日本芸術院会員の推薦を拒否する。
- 昭和31年4月、肺結核のため死去。74歳であった。

(3) 小田桐孫一先生著「鶏肋抄」より

- 人間の生活探究は、自分が本来あるところのものを深く探って強く引き出すことなのだ。今は力が不十分であるとしても、自分が本来あるところのものになろうとする努力を怠りさえしなければ、いつかはそれが補われるのだ。
- 本来あるところのものになりえた自分の力をもって一隅を照らし、愁える者のために歎き、乏しい者のために心を配らねばならぬ。
- 意欲を内発して進む姿である。他から押しつけられた形でなく、自分で本当の自分になるための道を選び、それをめざして自ら学び自ら習う姿である。

<資料4> [校名と校章](#)（鏡ヶ丘百年史 344 頁より抜粋）

新制高校となるに当たり、校名と校章を定める必要があった。校名としては「弘前」のほか、「鏡ヶ丘」「第一」などが候補に上がったが、結局「弘前」とすることになった。「弘前高校」という名称は、官立弘前高校と紛らわしいという反対意見もあったが、24年からは官立弘高が弘前大学文理学部になるということでもあり、この際その伝統をもわれわれで受け継ごうという意気込みもあったのである。

校章も官立弘高のものをそっくりもらったという意見もあったが、これはさすがに弘高出身の教師たちに抵抗があったようで、入れられなかった。そこで、校章のデザインを公募した結果、当時5年生の八木沢恒蔵（昭和24年弘高卒）の作品に美術の鳴海健次郎教諭が手を加えたものを採用することにした。円形に近い八稜の鏡の中に、正面を向いた大鵬を図案化したものである。26年ごろからは、少し縦長で、大鵬も正面ではなく横を向いたものも使われた。・・・



校章の変遷 右端が当初のもの。2, 3年後から大鵬の顔が横向きになった。左は29年に制定された現在の徽章。